みんぱくリポジトリ
国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnolo

大学博物館における学際的専門知と公共社会との融和に関する調査報告

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2012-02-29 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 五月女, 賢司 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/4572

大学博物館における学際的専門知と公共社会との融和に関する調査報告

五月女　賢　司
国立民族学博物館

1．調査の目的

国立民族学博物館、国文学研究資料館、国立歴史民俗博物館は、人間文化研究機構を構成する大学共同利用機関として、学術研究や展示を行う研究所である。この研究所としての博物館・資料館は、これまでも研究資源を系統的に収集、管理、共有し、それらにもとづく学際的研究を行い、また展示やワークショップといった公共空間へも直接的な展開を行ってきた。

人間文化研究機構が、学術的研究とともに今後より積極的に博物館・資料館機能を活用した公共空間への直接的展開を行うためには、まず研究所としての博物館・資料館の社会連携活動の目的・意義を明確にすることが喫緊の課題となる。そして、人間文化研究機構でなければできないことを系統立てて整理し、社会に発信していく必要がある。

国立民族学博物館をはじめとする博物館や資料館を有する人間文化研究機構において創出された学際的専門知の社会的活用の方法論を探るため、大学博物館における動向や展望に関する調査を実施した。

2．調査の概要

以上のような目的のもと、2度にわたり、国内の国立大学を拠点とする博物館における調査を行った。

◎調査対象と調査日

大学博物館における学際的専門知の社会化に関する動向や展望に関する調査対象と調査日は以下のとおりである。

＊北海道大学総合博物館（平成20年10月29日）
＊九州大学総合研究博物館（平成21年2月16日）

◎調査内容

各調査対象者に対し、以下の内容についてヒアリング調査を実施した。

＊大学博物館の社会における位置づけや理念
＊法人化後の大学博物館
＊学術知の社会化の手法
＊学内外との連携
＊ボランティアの位置づけ
＊フィードバックの方法

3．調査結果

両大学博物館で共通して言えることは、教員や館によって考え方に多少の違いはあるものの、自治体の博物館と違い、想定している利用者層のひとつに学生を挙げていることがある。

大学図書館は主にその大学の学生が研究利用するために設置されている。それと同様に、大学博物館もまたその大学の学生らの教育や研究で利用されるものであるということが、両大学博物館で意識されていることであった。博物館の「利用者」という言葉から連想されるのは、おそらく博物館への一般来館者であろう。しかし、社会構造の変化やデジタル化の進行などにより博物館の利用のされ方はかつてないほど幅広くなってきている。ボランティアとして博物館に関わることも「利用」のひとつであるし、博物館のホームページでデータベース検索をし、情報を活用することもまた「利用」のひとつである。同様に、学生が授業の一環で博物館を舞台に研究活動を行うこともまた「利用」のひとつなのである。

一方、小中学生などの児童生徒のための展示・教育活動は、研究者の卵の発掘や大学博物館の社会貢献の一環とみることができる。また、一般市民へのアプローチは大学博物館の研究成果の社会的説明責任の一環ともみることができる。これら児童生徒や一般市民へのアプローチは、大学博物館が社会に対してその存在意義を示すために欠かせないものであり、彼らはもうひとつの大学博物館の利用者として位置づけられる。

各大学博物館の教員らへのヒアリングの内容から、その具体的な利用方法やその背景となる大学博物館の理念や社会的位置づけなどを探ってみた。

ヒアリング対象者は、北海道大学総合博物館教員の湯浅万紀子准教授と小俣友輝助教、九州大学総合研究博物館の三島美佐子助教である。（以下、敬称略）

◎大学博物館の社会における位置づけや理念

両大学博物館とも、標本資料を保存し、研究、活用するということに重点が置かれている。あくまで研究博物館であるため、研究の大切さを学生や市民に伝える使命が大学博物館にはあるという気概を感じた。館によって地理的条件や館内のコンセンサスなどに大きな違いがあるが、資料と研究が第一であるという共通項は見出すことができた。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：地域によって地域社会からの期待はかなり違うという前提はあると思います。北大について言えば、地域の方たちから札幌には数少ない自然史博物館としての期待を受けてはいます。それを意識しながらも、やはり大学博物館とほかの博物館の違いについて分かっていただきたいので、私は展示解説のイントロで毎回これについてお伝えしています。その上でいろいろな学びをしていただければと思いますし、学びというように堅苦しくなくても、まず博物館は面白そうと思ってくださるだけでもよいです。そこから自分の関心を見つけてくださればよいと思っています。

今までは展示の回数を増やして認知度を上げてきたと言えるかもしれません。市民セミナーなどのアクティビティも盛んに実施しておりますが、当館の第一のミッションである標本の保存と研究の重要性、標本を保存し研究していくことが博物館活動のベースにあり、それがあってこその展示やセミナーだということを利用者にわかっていただきたいという思いが当館の教員全員にあります。展示に限らず、イベントやワークショップに学生を関わらせる場合も同様で、関わっ

て楽しかった、で終わらせるのではなく、博物館のミッションのもとにその活動をしているという意識がないといけない。イベントやワークショップを学園祭気分で「ああ楽しかった」で終わらせるのではなく、大学博物館の活動の一環として実施してその目的が達成されたかを評価することが重要だと考えています。

小俣：博物館は何をする場所なのかと考えると、大学の中にあるが大学のものを外に伝えたり外から入ってきた情報を内部に広げたり、という事をする窓口的な役割をする、というのは皆さん共通の概念だと思います。そこで何をしていくかというと、取り込むべき人は大学外の人、市民だったり……。多分、いちばん接点となっていちばんフローが激しいのは市民というか、地域に住んでいる人ということになります。

ここはすごくアクセスが良いんですよね、駅から近くて。ポプラ並木がすぐそこにあって。そういう意味で何かがあるから来るということではなくて、もうそこにあるから行く、という感じのスポットになっていると思います。それで入館者も多くて嬉しい限りです。これをしたから人が来たっていうことよりも、来館した数万の人がどういう感情をもっていったか、どういうお土産を持っていったかということが大切だと思います。

一方、学生があまり来ないという悩みがあって。それをどうしようかというのがここ数年の課題になっています。

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：九大の場合特に資料が学内に散在しており、移転も控えていますから、標本資料を一元収集する、それを活用できるようにする、というのが一番のミッションと捉えています。私個人は大学に博物館がある一番の意義は学内教育、人材育成というところに至りました。

国立大学法人の博物館として果たす役割ですが、各館がカラーを出して、普通の博物館ができないような事をやる必要があると思います。公立などの博物館では、来館者が少ないから潰せ、という話がでてきます。大学博物館は、高等教育機関の教育施設という位置づけがあるので、来館者数だけで評価しえない。逆に、大学博物館で、入館者数だけではかられるものでない博物館機能の部分が明確に示されるようになれば、それが公立などの博物館に対する正当な評価につながるようになると思います。大学博物館の重要な役割のひとつでしょう。もう１つは研究する場ということで、各分野ごとの専門研究は普通どこでもやっていますが、日本の中で博物館学的なことをきちんとやっているところは、歴史系はあるがあまり無い。だから教育普及的な面などをきちんと教えられるし自分達でもできるという教員がいる部局になればいいと思います。そういう意味で東大の博物館は展示の専門家がいる、北大は博物館に博物館学の専門家がいるし、科学コミュニケーター養成講座というところで、アウトリーチ手法やそういう人材育成をやっていると思います。九大はまだその辺りの館内のコンセンサスが得られていない。ちゃんと博物館学的なところや教育普及的なところも担えるような大学博物館にしたいと個人的には思っています。

博物館教育はかなり不安定なポスト。外国で勉強してきても、日本に安定したポストが無いので続いていかない。結局、個人事業主になったり業者に入ったりで、せっかく学んだことが日本に学として根付かない。そういう経験を持った人たちの知識や経験を集約して、日本に合わせて体系づけをやっていく必要があると思います。シンポジウムで一時的に集まるのではなく、１年２年の時間を取って。本当は国立科学博物館とかが博物館学、博物館教育学の教育コースをもっていくれればと思います。あとは、国立民族学博物館とか。

◎法人化後の大学博物館

大学博物館は社会に向けて研究のプロセスや研究成果を発信している。また社会が大学博物館に関わってもらうための大学博物館側の取り組みも活発になってきているという印象を受けた。法人化後のあるべき大学博物館の姿として、学生の人材育成こそが何よりの社会貢献だという考え方も一方で存在することは大変興味深い。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：この博物館の学術標本は社会の財産です。だからこそ、いかに保存して研究して次世代に残していくかを絶えず考えています。また、研究の成果やプロセスを社会に公開する施設としての博物館になった以上、社会的説明責任としての博物館教育というものを考えていかなければならない。科学技術コミュニケーター養成やサイエンスカフェの開催などの近年の様々な動きはすべてそのような方向に向いていると思います。展示を含めた教育活動、そういった博物館の活動自体が市民に対する説明責任を果たしているということもできます。

小俣：印象としてあるのは、僕が働き始めた大学の空気というのはとても自由だった、という印象があります。けっこう、国の機関なので縛られて縛られて、って思っていたんですけど。そうではなく割と幅があったなという印象です。他大学との連携を例に出すと、北海道情報大学にある装置を使って実習をしよう、そういったエクスチェンジをしたことがあります。その際にも大学という組織に縛られることなく、すぐしようという話になりました。もうすこし大きな話になると分かるんですけどね。その際にも大学の違いとか制度の問題は出ていないと思います、僕の周りでは。

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：法人化以後、大学全体が社会に向けて貢献をしようという雰囲気になっています。そんな中で、私は教育イベントを通して一般の方向けに出していくのは必要だと思っていましたし、館外で行なう展示や公開講演会はその一環です。でもまだうちの博物館は知名度がないし、むしろ最初に戻りますが大学の地域貢献は人材育成や技術移転に他ならない、と思うようになりました。学生教育で学生を輩出しているので、それ以上の社会貢献はないくらいだと思うようになりました。ただ一般的な博物館の機能も期待されるので、それに習ったかたちでインターフェイスになってほしい。

◎学術知の社会化の手法

両大学博物館とも、館の教育的使命のもとに、一般市民、博物館来館者、研究者志望の人を含む学生、博物館学芸員、ボランティア、ウェブのエンドユーザーなど様々な利用者に対して様々な取り組みをしている。一方的な教育だけではなく、双方向コミュニケーションを行う場や利用者の感性を引き出すような活動を行える場としての大学博物館というものを強く意識し、利用者とともに博物館を作っている。展示室という場を実験工房にして、試行錯誤をしながらよりよいものを作り上げるのが大学博物館の大きな役割のひとつであると考える。試行錯誤の過程に学生や研究者、外部の研究者や学芸員、一般市民などにも参加してもらうこと、また試行錯誤の末に完成したものを展示室という場や学会という場で発表したり、試行錯誤の過程に参加した人たちに他館でも実践したりしてもらうこと、これこそが大学博物館の期待されている先導的役割なのではないかとヒアリングを終えて感じた。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：来館者への展示解説では、目の前の展示物をただ解説するのではなく、それが展示されるまでのプロセスや、学術標本を保存し研究して次世代に残していくことの意味をお伝えするようにしたり、また北大には学術標本は約400万点ありますので、皆様が展示室で目にされる標本はそのごく一部にしかすぎないということをお伝えしています。この建物の構造上、来館者は一部の収蔵庫の前も通りますので、こういうところに標本を保存していますとご説明します。また、博物館の研究現場の一部をお見せするミュージアム・ラボでは、博物館の研究に想いを馳せていただいたり、博物館には標本整理などお手伝い下さっているボランティアも大勢いらっしゃることもお伝えしています。

リカレント教育の可能性としては、既に実施しているパラタクソノミスト養成講座があります。準自然分類学者を養成する講座で、様々な分野で初級・中級・上級とレベル別に実施しています。小学生や中高生、大学生、市民、専門レベルの高い方達、現職の学芸員も参加されることもありますので、そういう意味でこれはリカレント教育の役割を担える取り組みです。

（博物館の研究成果をボランティアを通じて社会還元するプロセスの留意点としては、）ボランティア登録の時点で、私が大学博物館のミッションと、ボランティアの位置づけを説明しています。それから、標本整理や展示解説など各分野担当の教員が指導します。研究室に近い部屋で活動することで教員のホットな研究を知るということもグループ内ではあると思います。他に、年に2回、ボランティア講座と交流会を行っています。毎回、博物館に関連した1つのトピックに限って、私や他の教員が講義や演習を行っています。ボランティアには博物館活動の一部を担っていただくだけでなく、セミナー、ワークショップ、イベントなどの情報も頻繁にお伝えしていますし、展覧会のプレビューへのお誘いもしております。

学生教育についていえば、やはり教育は時間がかかるものであり、短期で成果を出せるものではないと思います。ですから長い目で見ていろいろなことができる教育を、大学だからこそ、大学博物館だからこそ行っていければと、個人的に強く思っています。例えば博物館のプロジェクト運営に学生を関わらせる場合にも、こちらが企画立案して学生に一部を担わせれば、とても簡単で効率的に短期に成果を出せるかもしれません。でも、敢えてそうせずに、学生達が企画立案からプロジェクトの運営と評価まですべて担当できるように導いていくというのは、こちらが待って待って待って……何度もやり直しをさせて、でも待った分、学生達は本当に成長していきますので、それを見守り導いていくことが大学博物館としての教育ではないかと思います。

小俣：短いスパンで考えると、ウェブを通じて情報を発信する、マルチメディアを使って展示を分かりやすくする、という事に関しては、短期的にプロジェクトを立ち上げたり外部資金を取ったりして、それを華やかに充実させていこうと取り組んでいるのと、常に考えていることです。それ以外にも、人が集まる場所なのでその人をうまくコントロールして何かを作っていこう、特に大学なので「知」にまつわるような事を交換していく。こちらが出て行くことが多いと思いますが、彼らと共有しようという動きがあって。チェンバロを任せられていますが、チェンバロに関する動きはその1つです。重きとしては集まって来る人と関わることが多いので、自然に外部に開いていく、そういった形になっているところは大きいと思います。（筆者注：　文中の「チェンバロ」とは、平成16年の台風18号で倒れた北海道大学のポプラ並木のポプラを材料に作られたチェンバロのこと。北海道大学総合博物館の交流の場「知の交流」コーナーや学外において博物館ボランティアらによる演奏会を行う。）

また、月１回レギュラーで市民セミナーをしています。もちろん自由に入れる場所なのでリピーターは多いのですが、そういう意味で開かれた場所、交流ができている場所かと思います。ただそれはレクチャーというかたちなので、先生と市民といういわゆる一車線ですけど、もうすこし相互的というか、ロボットコンテストのように学生が市民を集めてそこでインタラクティブなことをする、という。僕でいえば「４Ｄシアター」というのがありますが、サイエンスカフェのようなかたち宇宙の先生のところにいる学生が、自分の研究をただレクチャーするだけではなくて、４Ｄシアターを見ながら体験型の学習をする、またそこにいるボランティアが研究テーマを語りながら通訳する（筆者注：「分かりやすく説明する」という意味)、市民に向けてメッセージを発信していくという、ファシリテーターを用意して市民との交流を深めていこうというプログラムも進行中です。（4D シアターとは、「国立天文台４次元デジタル宇宙プロジェクト」において開発された、天体や天体現象を空間３次元と時間１次元の４次元で可視化するためのソフトウェア「Mitaka」を用いた、宇宙に関する教育プログラムを運営するためのシアター型展示室。）

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：芸術工学研究院のグラフィックスの先生が演習の中で博物館ポスターを取り上げてくださり、学生さんが見学しに来ました。今年度は芸術工学研究院の別の先生の演習で、ユーザーサイエンス機構のポスドクの人の巡回展と大学博物館展示室の２つを素材にして、学生がそこを発想空間として捉えた時に、どんな形があるかをテーマに自分達でその空間をデザインするような演習をしました。たしか空間造形論の演習でした。授業の流れとしては、一番最初に先生が講義の目的を話し、一番最後は模型を作って完成、ポートフォリオでデザインの解説を提出したら単位が出ます。私は九大博物館の展示室について、ポスドクの人は巡回展についての話を学生にするのが１コマ。次はグループ分けした学生が好きなほうを選び、私の方に来た学生は私が展示室の説明をします。その後、あの展示室を使ってあそこを発想する空間にするにはどうしたらいいかを考え、ひとりひとり短いプレゼンをします。それが次の授業です。それに対して勉強する。その次から実際に模型作りです。学生のアイデアの中で、実現可能なものもありました。そこも問題はお金になると思いますが、学生にとっても大学にとっても良い。今ある展示室は一応常設展示室という名前を付けていますが、私の捉え方では実験展示室です。お金もかけていないし見栄えもしないから、むしろトライ＆エラーをする展示室という感じです。移転後の展示室づくりへの素地になると思っています。問題は専任教員でこの館にデザイン系の人がいないことです。例えば展示学的なところや空間デザインを自分の研究テーマにしている先生がいて、研究の一環でやるというと、また見栄えや捉え方も変わってくると思うのですが、どうしても素人が自分の技術を磨くためのトライ＆エラー、というような状態ですから、そこがちょっと問題です。

（利用者の主体的な学びや創造活動を促すような博物館の取り組みとしては、）ワークショップがあります。去年から始めたばかりなのでそんなに回数はやっていませんが、芸術工学研究院の先生と一緒にやったインクルーシブデザインワークショップは、参加者を学内外で公募し、一部単位の欲しい実習履修者もいて、障がいがある方も参加して、そこの展示室でみんなで博物館を作ろうということをやりました。また３月にはエクストリームユーザーとしての子どもということで、やります。その過程や展示が子ども達にとってどういうものなのか、子ども達にとって良い表現、子ども達が考える問題点は何か、というのを調べていくようなデータ収集もできるような場にします。

見せるのは研究成果だけでなく、研究やっている人はこんな人、というのもあると思います。

研究者のイメージはステレオタイプ。普通の人だけれど、探求することの面白さを突き詰めてやっている人ということを伝えられればいいなと思います。例えば毎年1回おこなっている公開講演会はこれまで一方向的なものでしたが、今年は、かけあいや会場にマイクを向けるようなことをして、演者の魅力をひきだすような工夫をしたら、とても好評でした。

アウトリーチといった時、博物館的には外部に対して何かを見せる学習機会と思うのですが、九大の農学部の先生が言うには、アウトリーチは技術移転として捉えられている。大学博物館にもある意味それが必要で、キュレーションや博物館教育、展示、教育普及などのスキルや理念を移転することが組織立ってできればと思います。

私は、博物館は時代と共に変遷していくものだと思っています。最初は個人的な趣味の部屋のようなものからだんだん公開するようになって社会性を持って、その中で位置づけや専門性がたくさん入ってきて今に至る。例えば10年後20年後の博物館は今と違ってきていると思います。時代とともに変わりゆくものという前提で、フレキシブルに取り組んでいく必要がある。

◎学内外との連携

両大学博物館ともに、特に学内連携に重点が置かれているようであった。学内には様々な学部があるので、大学博物館を核にしてしっかりした連携ができればこれ以上ない学際的専門知が創出される。総合大学にはそうした潜在的能力が備わっているのである。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：総合博物館としては学内の全ての学部や機関と協働していきたいという思いがあります。実際にご協力いただいており、海外の博物館とも提携を結んでいます。

（北海道大学総合博物館は）いままでも「総合」博物館として活動してきましたが、北大の歴史やオホーツク文化、考古の展示物もありますが、展示物は自然史系の標本が多いです。常勤9名の教員（自然史系と情報教育系）では、総合大学の総合博物館としてカバーすべき分野すべてに対応できませんので、60数名の博物館資料部研究員にご協力いただいております。文系の先生もいらっしゃいます。様々な分野の方々と更に連携を深めることに今後も努めたいと思います。来年は、文学部と一緒に企画展を開催する予定です。

新しい動きとしては、今年度、北大の「博物館を舞台にした体験型全人教育の推進」というプロジェクトが、文科省の質の高い大学教育推進プログラム、教育ＧＰに採択されました。今年度からの3年間です。学部教育を対象とし、総合博物館を舞台にして、分類学や博物館コミュニケーションに関連した授業や実習から成る教育システムを作っていきます。既存の授業に新たな授業やプロジェクトを追加して体系化していきます。既に実施されている全学のカリキュラムの枠にこのシステムが浸透していくのはかなり難しいと思いますが、全学的に応援してくださると思います。学生達はそれぞれ所属する学部の授業だけでも忙しいので、博物館のこの教育システムにいかに関心を持ってもらい取り組めるかがチャレンジだと思います。まだこれから始めるところですので、今後の展開を見てご意見をいただければと思います。

他の学部や外の先生方からのサポートとしては、既に資料部研究員がいらっしゃいますが、他にも個人的に博物館に関心を持ってくださる方は少なからずいらっしゃいます。でも学内全教員が、というところにはとてもなりません。とにかく関心を持ってくださる方々と実績を積んで、こういうことができるということを広く分かっていただくのが一番早いやり方なのかなと思います。市民セミナーなどでも意識的に、文系などいろいろな学部の先生にご講演をお願いしていま

す。ご講演いただいて市民の方々からの反応がダイレクトに返ってきて楽しかったというご感想をいただいたこともあります。そしてまたご一緒に何かできれば、という思いはあります。

小俣：例えば学内に「ボランティア相談室」というのがあります。特に学部生に対して用意されている部屋です。そこに行って何かボランティア活動を探すということをするための部屋です。そこにアクセスをして、お互いにボランティア募集の情報があればそこに流す、そういったことをしましょうという話を一年位前にしたことがあります。

チェンバロがらみでは、あの展示をやっていくにあたって僕が元気な時はいいんですけど、そうではなくなった時にあれが捨て置かれることは必至なので、学内で「音楽学」という「音楽」のタイトルのつく授業を持っている先生方にアクセスして、彼らを引き込むことによって展示を中心に学内の部局を結び付けていくようなかたちがとれたら、ということでやっています。それは一年前ですが、文学部、法学部、工学部の先生方にアクセスをして彼らにチェンバロという1つのターゲットを中心にしていろいろなアドバイスをいただいたり、それを持っていってイベントに使ったり、ということをしています。音楽会は特に博物館でやるボランティアの活動です。授業で使ってもらって、今のピアノ、楽器と昔の300年前の楽器を比べてどう違うか、というように学術的に利用してもらう、という動きですね。これは展示を使った教育活動ということになると思います。あとは広報的な意味で、洞爺湖サミットに集まった人にレセプションで使われたりとか。それでその学内とのつながりというのと、学外とも少しつながっています。チェンバロは学生も使いたがるので、たまにそういうことがあって。工学部の先生は実は学生のオーケストラを持っています。そのオーケストラは現代楽器なんですけど。現代楽器と古典楽器をあわせてコンサートをしよう、という動きはあり、これまで数回行っています。材料の先生も、彼は本業があるのでサブではありますが、あれに関してどのくらいの湿気・温度であれば維持できるのか、という事も興味あるようですね。将来的には「楽器」というよりは「材料」として使ってもらったり、非破壊の形だったらいいんですけど。教材として使ってもらったり、そういうことができればと思っています。

（研究にしぼった形で他学部、地域、などと連携した例としては、）僕は2年前に内部でデータベースを作りました。鉱物・考古学・植物学の3分野をまとめたものです。それでいうと、鉱物の先生、考古学の先生、植物の先生の4人で作ったとなるので、ITの人とデータベースの人と標本の人っていうコラボレーションができた。データ入力もすべて学生やアルバイトを雇ってしてもらって。これは公開しています。それが1つです。あと、博物館は資料があって、その資料をどう見せるかというところで僕がここにいるので、今とっている科研にしても昆虫の先生と2人で、その昆虫の標本を使ってデータベースと展示を充実させていくというプロジェクトを進行中です。こういう風に小さいところでコラボレーションしています。外部では、いま始まりかけているのは建築の人とやっています。歴史的建造物のデータベースのインターフェイスと内部充実ということで。

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：もともとこの博物館はいろいろなところから都合してポストができている。それで2ポストが理学部の地球惑星科学科から出されているので、その先生方が今でも協力講座を理学部内にもっていて、直接学生を持って、博士課程まで見られるようになっている。この大学博物館の教員は基本は学生を持てない組織なのですが、その先生方はこうした協力講座を持っているので、その学生さんはかなり博物館に近いです。

博物館の教育普及やサイエンスコミュニケーションを自分が学ぶとしたらと思った時に、調べてみると、学内でひととおりの先生が揃う。九大はそれだけ人材がいるので、うまくカリキュラムをくんだり連携していけば、九州の文化や博物館カルチャーの底上げができると思う。あと九大は工学や農学など実益系が強いところなので、大学の持つ特色を活かす方向で、博物館産業や照明、リサイクル可能な展示資材などを研究開発してもらうように他の部局にお願いするのもありだと思っています。

◎ボランティアの位置づけ

ボランティア制度は北海道大学総合博物館でのみ導入されており、九州大学総合研究博物館には存在しなかった。北海道大学総合博物館では、博物館の使命や理念を共有できる相手だということは大切な要素であるとのことである。その上で、研究者とボランティアの間の信頼関係を築くことには努力を惜しまない姿勢が感じられた。学術知の社会化の一端を担う人たちということで、様々な形で研究者がボランティアと交流を図っていた。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：ボランティアは博物館のよき理解者であり、職員ではありませんが限りなく内に近い、博物館のために協働していただいているパートナーだと思っています。ボランティアの方々と一緒に社会に関わっているという位置づけですね。ボランティアに登録していただくときは、当館には４つの使命があることをお伝えして理解していただき、そのような博物館に貢献したいと思っていただくことを第一条件としています。標本を大事に扱うことも大事な条件です。ただ化石のクリーニングをしてみたい、という動機だけではお断りしています。

小俣：自発的・自立的な活動をしてもいいと認めているところもあります。僕個人としてはその一面が大きいと思います。博物館の運営の方向に沿ってほしい、そこが分かっていればどんな活動をしてもいい、というところがあります。僕としては活動を業績化してもらい、ここにいたことを将来のものにしてほしいという風に考えています。教育をして学位を与えるような感じだと思います。

僕はITボランティアと、チェンバロボランティアと４Ｄシアターのボランティアの３つ分野を担当しています。博物館でやるイベントに対して企画・運営をするという形で関わってもらっています。ITボラの場合ちょっと違って、何か仕事が来た場合にプログラミングを手伝ってもらったりという感じでお願いしています。

（ボランティアが偏った知識や偏見を博物館利用者に伝えるのを防ぐために、）ボランティアの中でスーパーボランティアという人を置いて、彼の正しい知識を伝えてもらうようにしています。

（研究員とボランティアとの関係としては、）研究者は必ずボランティアの顔を見てパーソナリティをチェックしないとやってもらう気にならないので、それは近しい関係であると思います。お願いするのもいろいろ状況があると思うので無理強いはせず。お願いする感じです。

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：（筆者注：九州大学総合研究博物館には、ボランティア制度は導入されていない。）九大にはＮＰＯの現場からたたき上げできたような先生がいます。その先生の現実的な話を聞いて分かったことがあります。指定管理者制度とボランティアの問題は密に関係していて、ボランティア側に立って現場でやってこられた方にとっては、今の指定管理者制度のもとでのボランティアのとらえ方が本来のものではないという声があります。九大の博物館でも、ボランティアを導入し

たいという動きはありますが、まずは教員自身がボランティア（またはボランティアリーダー）講習を受けて、「ボランティアリテラシー」を高める必要があると私は思っています。他の公立などの博物館や大学博物館のボランティア制を拝見してきていますが、実はとても奥が深いものだと考えています。

◎フィードバックの方法

両大学博物館とも、所属研究者が面接調査やサイエンスカフェ、ワークショップなど様々な手法を用いて調査をしている。それらの声を直接的、間接的に博物館運営に反映させようとしていた。調査をするかしないかということよりも、聞こうとする意識があるかないかの方が重要であることが実感された。

＊北海道大学総合博物館へのヒアリング

湯浅：博物館としては質問紙調査を実施しています。私が2年前にこちらにまいりましてから、来館者調査を研究プロジェクトとして実施しようと教職員数名でチームを組んで体系的に実施しているところです。また、展示解説した方々に感想を伺ったり、折にふれ展示室で来館者の反応を観察したり、感想を伺ってもいます。他に、展示室のリニューアル時には、トラッキングや面接調査、モニター調査も実施しています。私個人の研究では、博物館における市民や学生の広い意味での学びが長期的にどのように現れるかという調査を実施しています。数年、数十年というスパンでどんなインパクトを受けたかについて、主として面接調査を実施しています。来館直後の質問紙調査では把握できないことが検証できればと思います。

小俣：サイエンスカフェにおける住民との対話・コミュニケーションの中で、研究者側も「ああこの言葉通じなかったんだ」という発見はあるようですね。4Dシアターでいうと、院生とファシリテーターが話す機会がありますが、普通に会話をしているようで専門用語を使ってしまう。それで何のことだか分からない、でもそのままうんうんって言っていると、あとで「それ何？」という風に。こっちで分かり合っても分からない、ということがあります。そういうところでコミュニケーションが生まれて、研究者も気づきが生まれる、ということはよくありますね。その気づかせる目的でもサイエンスカフェをやっていることもあると思うので。

逆に市民側が何かを得たことで生活が潤ったり、何かに生かしたり、もしかしたらそれが少しずつ広がって社会全体が変わっていくこともありえます。ただ、その情報収集が難しいというのは誰もが思うことだと思います。発信しました、受け取りました、そこまでは良いですが、受け取って何か持って帰ったかというとそこは評価しづらいですよね。すごく凝ったことをしようとすると科博のようにIDを発行してカードを配って、家に帰ってから展示物で見たものをチェックしてそれがどうだったかという感想とかレポートを送ってもらって……。そのようにすると確かに根付いてるということがいえると思いますが、そこまではまだ手がまわってなくて。でも楽しかったなというのは残りますよね。それでまた来てくれたら、何回か足を運んでもらって。企画展示も入れ替えをしているので、そこでまたいろいろな知識を深めていって。たまにズバッとくるものがあれば研究者の道に進むこともあるかもしれない。

＊九州大学総合研究博物館へのヒアリング

三島：少年科学文化会館で行う公開展示でアンケートをとっています。学内経費をとって、もう少し博物館学的な視点から調べていうこうとやり始めたところです。今年度は、登録してくださっている、子どもや大人の一般の方々を対象に、大掛かりなアンケート調査をしました。

展示室でやったインクルーシブデザインのワークショップでは、一番最初にチーム分けしてアイスブレイク。その後展示室を見て問題点をポストイットに挙げていく。そこがブレインストーミングです。あとはみんなで持ち寄って、イメージカードをいうのを使って、現状はこうだ、その後どうしたい、というのを３点くらい挙げます。そして皆の中でこうしたい、というのを共有する。その先にどうすればいいか話し合って、チームに１人いるデザイン系の学生が最終的に絵にする。それがもう少し進むと多分模型になると思います。子どもの場合も基本は同じです。この展示室の問題ははっきりしているので、むしろ気がつかない問題のほうが問題。それをいろいろな視点で出してもらえる。想定外のものはそんなに無かったです。いまはその問題点をエクセルに入力して、何が問題かをグループ分けして解析しなくてはと思っています。良いところはあえて出てこないし、博物館のほうに反映されているはず。そういうワークショップの手順などをフローにして誰でもそれができるように解析までのメゾッドをまとめるのが大学博物館の役割だと思っています。

４．考察

◎大学博物館の姿

それぞれの大学博物館は、その置かれた立場や地域の状況によって、あるべき姿というものがかなり変わってくる。北海道大学総合博物館と九州大学総合研究博物館とでは、同じ大学博物館でも立場や状況が大きく異なる。しかし、大前提として大学博物館には研究博物館として標本資料を一元的に管理・保存し、研究、活用するということの使命があることになんら変わりはない。

北海道大学総合博物館は、観光客や気軽に立ち寄る来館者の割合が非常に高い。一方、九州大学総合研究博物館は郊外にあるので、特別な行事の時などに、そこに行こうと目指してくる来館者がほとんどである。このように来館者の層も違うし、地域によってその役割も違う。九州大学総合研究博物館は研究博物館として学生も対象だと主張できる部分があるし、ヒアリングをした研究者からも学生対象プログラムの充実化の意思が伝わってきた。しかし、北海道大学総合博物館では学生が対象であるのも当然のことながら、札幌市民や観光客も対象として博物館学の実践的研究をしていかねばならない。札幌市内に自然史博物館が、札幌市活動センターと植物園と北海道大学総合博物館の３ヶ所しかないので、札幌市民や観光客に対して果たすべき役割というものがあるからである。

このように、利用者主体の博物館としての視点で考えた場合において、標本資料を活用する対象者は明確化される必要があるし、大学博物館の理念に基づいたメッセージの発信方法と社会の要請に応じた標本資料の活用方法を探ることは大切である。しかし、標本資料を後世に残すために活用頻度は限定されなければならないという保存上の課題も一方である。このように、ヒトが主役か、モノが主役かという一見二極論化された議論は、両極の二論のみをモデル化して論じることで互いの対比をはっきりさせ論点を分かりやすくするという利点はある。しかし、収集・保存、調査・研究、展示・教育という一連の活動が一体化された研究博物館という枠組みの中では、このような議論はあまり意味をなさない。むしろ両者が共に主役であり、この両者が存在するからこそ、博物館という知的装置において両者が出会った時に新たな知が生み出されるのだとする考え方の方が大切であるということを、大学博物館での２度の調査は教えてくれた。

◎今後の人間文化研究機構のあり方

大学博物館に関する動向や展望の調査は、国立民族学博物館をはじめとする博物館や資料館を有する人間文化研究機構において創出された学際的専門知の社会的活用の方法論を考える上でも、非常に参考になる。

研究博物館としての大学博物館同様、人間文化研究機構を構成する博物館・資料館も、大学共同利用機関として、所属研究者が機構内外の研究者や博物館学芸員や学生らと共同利用という形で展示室を実験工房化し、試行錯誤をしながら実践的研究を行い、よりよい展示やワークショップなど公共空間への働きかけの方法論を作り上げるという役割を担う必要がある。試行錯誤の初期の段階から、共同利用をする研究者や学生らだけでなく、ボランティアや小中学生などの一般市民の参画によりフィードバックをもらうこと、また試行錯誤の末に完成したものを展示室という場や学会という場で発表すること、また共同利用をする研究者らが全国の博物館等施設でそれぞれの地域の文脈に即した実践を行い、さらなる改良を加え洗練させていくこと、これこそが大学共同利用機関としての人間文化研究機構に期待されている先導的役割なのではなかろうか。

以上のように、人間文化研究機構が博物館や資料館を有することによる、学際的研究のさらなる推進や、社会における学際的研究の理解促進、これらがなされることによる学術的意義は極めて大きい。来館者数や入館料収入の増減に惑わされることなく、共同利用による学際的専門知の社会的活用の方法論を探ることにより、博物館・資料館活動の内容のさらなる充実化が図られ、研究者の研究活動と市民の社会活動が推進される。このような研究博物館としての人間文化研究機構を構成する博物館・資料館の存在意義を再認識することが、今あらためて求められているのである。

謝　辞

末尾ながら、今回ヒアリング調査にご協力いただいた方々に心より謝意を表します。